

















去年可決された幼妻法案、通称オサホウによって私は学園に通いながら、ルイ君の妻となった。ルイ君は資産8億の為替トレーダーなのに、性癖が災いして28まで童貞だった。

いい事なのか悪いことなのか初めての相手はこの私。

ついに子供の生まれる数が**50万**を割り、パニックになった日本政府がどんな変態サンでも子供を作る男には作ってもらおうと可決したのがオサホウらしい。もちろん女の子と両親の同意は必要だ。さすがに人権無視はあり得ない。

うちは、貧乏な母子家庭。**3**年前に起きたコロナで学校の授業は機能しなくなって、塾に通える子供の成績は維持され、私たち貧乏人の成績は急降下していくのを体験した。世の中はあからさまに不公平で、金が世を支配していると私は**10**歳で悟った。だから公園でルイ君に放課後の公園でナンパされて、母親にナイショで付き合うようになった。そして月日が経ち、私はルイ君と結婚する気になった。

「新自由主義ってのが、日本を解体したんだ」



ルイ君は一泊一人5万円もする箱根の高級旅館の個室風呂で、自慢のウンチクを始めた。

「新しい自由ってこと？」

面倒だけど相手しないと厄介だ。

「新しい自由ってのは、能力があれば稼げるし、なければ、くたばりなってしまうことさ」

今日もルイ君は嘘くさい教育者みたい。でも、彼の言うとおりで。ルイ君に会うまで江ノ島に行くのが唯一の家族旅行だった私の心は、いい加減くたばってきていた。**300円位**の古着ばかり着せられてクラスでも臭いとかダサいとか言われていじめられてたし。



確かに新しい自由をもらって、ルイ君はドウドウとガキの私の胸をもんでいる。私のブラを剥ぎ取り、小豆色の乳首が箱根の冬の冷気に晒される。今日は大晦日だ。除夜の鐘

の音がグオーンと山のどこからか聞こえてくる。ああ、風情がある。

「ねえ、寒いよ、お湯に入っていていい？」  
「もうちょっと待って」

北国生まれのルイ君は、寒さに強すぎる。私は、胸を両手で隠しながら温まる事もできず個室風呂の浴槽の縁に座って鳥肌をたてている。檜の露天風呂が湯気を冷気に浮かべてオイデオイデする。都営アパートの小さいカビだらけの風呂は憎んだが、今は入浴好きの私。

「パパ、もう我慢できない。お湯に入っていていい？」

「いや一瑠海の裸体は美しすぎる。月光に照らされた状態を見たかったんだ」

「後で児童相談所に通報すっからね」

私が結婚していることは学校では内緒にしている。政府がプライバシーの保護を徹底し



てくれてる。だからルイ君は表向きは私のお父さんなのだ。私の人生で初めてのパパがペド変態野郎って.....。



「除夜の鐘聞きながらお風呂って最高だよ  
ね」  
「だな」

私はルイ君の膝の上に乗っている。ちなみにまだアレは入れられてない。  
でも、後ろからハグされた状態でもう身体のどの部位も触られ放題だ。



「やだ、アソコ触らないで。除夜の鐘は煩惱消すんでしょ」  
「瑠海の見えたら煩惱止まんないって」

全てはお金のためだ。それにルイ君は私を守ってくれる。高級旅館を予約して尊厳を与えてくれた。6年前のgo to キャンペーンの馬鹿騒ぎに、クラスで私だけどこも行けず恥ずかしかった。



「大好きだよ、瑠海」



「大好きなのはガキのおっぱいでしょ、変態  
パパ」

「いや、誰でもいいんじゃないって」

「本当っすかあ」

私はつい意地悪を言う。しょうがない。ルイ  
君は私の意思を無視してエッチなことをし放  
題なんだから。バツを与えてやりたくなる。



「最近脚本書いてんのか？」

「うん、書いてるよ」

私はやる気のない弱小演劇部で脚本を書いている。貧乏で本しか娯楽がなかったので、私は読書好きだった。で、好きが高じてアホな妄想を書いている。



「どんな話だよ」

「お金の起源を考えたんだ」

「へえ」

私達は湯船で見つめ合い、私からキスをした。ルイ君はイケメンじゃないけど癒やし系のカワウソ顔をしている。こういうのが人たらしの顔らしく、年上の人(男女問わず)に可愛がられるらしい。女性にもまあまあモテたみたいだが、ロリコンなのでずっと童貞だったとか。

「相変わらず訳分からんこと考えるね」

「貝殻とかを王様が持ってきて、明日からこれがお金だと言って誰も理解しないでしょ」

「そうだろうね」

「それって文明の分かれ目だよね」





私はルイ君の肉の薄い胸に頭を載せながら、夜空を見上げた。箱根の山の上だから、

空気が綺麗で星が手が届くくらい鮮明に見える。

「貝殻マネーの導入が文明の分かれ目って大袈裟だろ」

ルイ君は律儀につっこみをいれる。

「それまでは米とか絹がお金のかわりだったでしょ」

「そうだろうね」

ルイ君は苦笑して私の髪を撫でてくれた。

「王様は貝殻マネーの有り難みを伝えるのに、一人の美しい盲目の女奴隷を連れてくるの」

「ほおほお」

ルイ君は湯船の中で私の小さな尻に手を伸ばす。くすぐったい。おしりはやたら敏感だ。みんなそうなのかな。



「この尻好きめ」

私は彼をにらんだ。

「ごめん」

「で、王様は貝殻百枚もってきた国民に、この女奴隷を好きにしていっていいぞっていうんだ」

わたしは脚本の続きを話す。

「それじゃあ発奮する男が出てくるよな」





「そう。エロを見たくてパソコン普及したのと同じ原理」

こういうウンチクはルイ君から聞いてきた。

私は立ち上がって、両手を大袈裟に広げた。勿論ガキの未成熟おっぱいは丸見えだ。

「ああほど良いおっぱいで神々しい」  
ルイ君は私の乳首を両手で後ろからつまむ  
が、私は声を抑える。

「お、感じてんのに我慢してんな、偉いぞ」  
もちろん私を辱める言葉はシカトだ。